

田中治太郎著、日系カナダ人強制移住時の混乱 – 1942 年

大木 崇訳

1. 第二次世界大戦の犠牲者

1941 年 12 月 7 日、日本の真珠湾攻撃という劇的な事件の犠牲者として、ブリティッシュ・コロンビア州内に住居を構えていた 2 万 3000 人の日系人は、その住居を奪われ、移住民の身分を強いられた。その約 75% はカナダ市民であり、多くはカナダ生まれであった。この措置はすべて、戦時措置法に基づき、国家安全保障の利益のために行われた。この状況を理解するには、ブリティッシュ・コロンビア州における日本人の背景を知る必要がある。(J. C. 田中が編纂した歴史書が、この点で参考になるだろう。)

1941 年以前、我々がブリティッシュ・コロンビア州で 65 年間にわたり幸福に暮らしていた間、一部のカナダ人からの偏見がまったくなかったわけではないが、1941 年以降、これらの偏見が両民族間の誤解を絶望的に助長し、日本人居住者を孤立したコミュニティにしてしまった。我々は強制移住に備える準備ができていなかった。その後の強制移住については、詳細な記録を残した田中氏がその経緯を記している。まず第一に、日本が米国を攻撃した際、カナダ政府には、日系カナダ人を強制移住するための事前計画は存在しなかった。移住は慌ただしく、混乱の中で行われた。日系カナダ人は (1908 年以来) 労働のためにブリティッシュ・コロンビア州内陸部や他州へ移住していたが、今回は強制的なものであった。移住計画は管理も実行も杜撰であり、家族が引き裂かれる事態を招いた。男性は収容所に拘束され、女性と子供たちは自力で移住しなければならなかった。

2. ブリティッシュ・コロンビア州保安委員会の設立

ブリティッシュ・コロンビア州保安委員会は、1942 年 3 月 4 日、オタワの総督邸において第 1665 号令に基づき設立された。委員長にはオースティン・テイラーが任命され、ミード大佐 (カナダ空軍) およびシャラス司令官 (ブリティッシュ・コロンビア州警察) が補佐を務めた。

委員会の職務：

- (1) 委員会の職務は、ブリティッシュ・コロンビア州の保護区域から、すべての日本系住民を移住させるための計画、監督、および指揮を行うことである。
- (2) 前記の職務を遂行するため、委員会は、人々の移送、輸送手段、および移住に関連するすべての事項について、あらゆる手配を行う権限を有する。

(3) 委員会は、必要とされる範囲において、当該人々の住居、食事、世話および保護を講じなければならない。

(4) 移住および移住者の配置に関する計画は大臣に提出され、大臣の承認を得た場合、委員会により実施されるものとする。

委員会の権限：

(1) 委員会は、命令により、いかなる日本系の人物に対しても、ブリティッシュ・コロンビア州の保護区域から退去し、当該区域内に留まること、または委員会が指示する場所へ移住し、そこに留まることを命ずる権限を有する。

(2) 委員会は、当該規則の規定に基づき移住させられた者の行動、活動及び規律に関し、いかなる規則も定めることができる。

この委員会は、1943 年 2 月 5 日に労働省に引き継がれた。

3. カナダ国民および政府の態度と行動

戦争初期の世論は、日本人に対する怒りと憎悪に満ちていた。その経験をした者だけが、我々の孤独と悲しみを理解できる。これを読んでいる若者たちにとって、以下の見出しは当時の暗黒時代の厳しい現実を如実に物語っているだろう。

1941 年 12 月 7 日：日本による真珠湾攻撃を受け、カナダは日本に対して宣戦布告し、40 名の日本人をブリティッシュ・コロンビア州バンクーバーの移民局ビルに一斉に連行した。

1941 年 12 月 7 日：カナダ生まれおよび帰加日本人の所有する漁船団の動員停止。

1941 年 12 月 8 日：カナダはすべての日本語学校を閉鎖するよう命じ、3 つの日本語新聞の発行が停止された。

16 歳以上のすべての日本国籍者、および 1922 年以降に帰加した 16 歳以上の帰加日本人に対し、R.C.M.P.への出頭が命じられた（期限は 1942 年 2 月 7 日）。

1941 年 12 月 9 日：バンクーバー市議会議員 H.D.ウィルソン氏が、ブリティッシュ・コロンビア州における日本人に対する反対運動を開始した。

1941 年 12 月 25 日：香港陥落を受け、日本人に対する強い差別が台頭し始めた。

1942 年 1 月 5 日：ウィルソン、暴動の可能性を語る。H.D.ウィルソン市議は委員会メンバーに対し、何もしなければ暴動が起こると述べた。

1942 年 1 月 7 日：ブリティッシュ・コロンビア大学は、カナダ生まれの日本人学生を軍事訓練から除外した。

日本人に対する特別登録が義務化された。扇動により動揺が広がり、地域の緊張は依然として高まっている。

1942 年 1 月 16 日：カメラとラジオが禁止された。

1942 年 1 月 19 日：マクウィリアムズ牧師が二世の忠誠を宣言。

1942 年 2 月 5 日：グレーター・バンクーバー青年評議会が、保護区域からすべての日本人を排除する決議を可決。

1942 年 2 月 15 日：シンガポールの陥落、および神風特攻隊による無敵の英国太平洋艦隊の壊滅。

1942 年 2 月 18 日：米国在住の外国人、および二世も強制退去の危機に直面する。シンガポールの陥落を受け、米国太平洋沿岸では波紋が広がりつつある。

1942 年 2 月 19 日。今やあらゆる事態が想定される.....世論の高まり.....事態は急速に進行する。

1942 年 2 月 26 日。当地の日本人に対する「日没～日の出」の外出禁止令は、2 万 3000 人全員に影響を及ぼすことになる。

日本人にはじっとして目立たないようにし、不必要に街へ出ないよう命じられた。私たちの不安や苦悩を訴え、より良い解決策を見出すための集会も、R.C.M.P.（カナダ王立騎馬警察）の許可なしには、いかなる公共のホールでも開催できなかった。毎日、至る所で日本人が職場から解雇され、営業許可も制限された。船を差し押さえられた漁師たちの福祉に対する配慮は一切なされなかった。ヘイスティングス・パーク・クリアリング・センターの家畜収容施設は過密状態で、悲惨な状況にあった。

4. 組織が急ごしらえで結成された

連絡

日系人戦時保安連絡委員会（1942 年 1 月中旬頃に結成）

日系カナダ人市民評議会（1942 年 3 月中旬頃に結成）

日系カナダ市民（帰加者、1942 年 3 月中旬頃に結成）

家族単位の混合集団移住（1942 年 4 月 10 日頃に結成）

戦争の危機は、地域社会の組織や日本人コミュニティのあらゆる側面に深く浸透しており、戦前の社会構造では、日本人同士の混乱や不信感を防ぐことはできなかった。

森井悦司氏を委員長とする「日本戦時保安連絡委員会」は、ブリティッシュ・コロンビア州保安委員会から高く評価され、R.C.M.P.（カナダ王立騎馬警察）もこの組織を公式の連絡団体として認めていた。しかし、日本人コミュニティ内では、委員長の性格、人柄、そして信頼性が疑問視されていた。一方で、彼はかつて RCMP と関係があったことから影響力のある人物として恐れられ、主に実業家や富裕層で構成される右派の一世グループから尊敬されていた。日本戦時保安委員会のメンバーは主に日本国籍者であったが、R.C.M.P.は、一世は行儀が良く、規律正しく、法を遵守する一方で、二世は頑固で非協力的な集団であると主張した。

もちろん、カナダ生まれの日系人の息子や娘たちには、この差別的な扱いや法の不当性から身を守る権利があり、彼らは当然のことながらそうした。森井委員長は、カナダ国民と政府の態度を是正した。彼は、州境のすぐそばにあるカナディアン・ロッキーの深い雪の中、400 人から 500 人の日本人がレインボー、ルツェルン、ジャスパー、イエローヘッドの道路建設キャンプへ自発的に移住すれば、残りの日本人は現在の居住地にとどまることを、カナダ政府が許可するという立場をとった。1942 年 2 月 23 日から、森井と R.C.M.P.の命令により、約 1,300 人の日本人が、道路建設キャンプへ移送された。しかし、1942 年 3 月 4 日に大統領令第 1665 号に基づきブリティッシュ・コロンビア州保安委員会が設立され、その命令により、市民権の有無にかかわらず、すべての日本人が太平洋岸の保護区域および内陸部から移送されることとなった。これにより、日本人たちの心には全く異なる状況が浮かび上がり、結果として森井は日本人コミュニティにおける信頼を失うこととなった。

「帰加市民組織」の見解と密接に連携していたのが、「日系カナダ人市民評議会」であった。この組織は、基本的にカナダ生まれの独身日系人だけで構成されていた。そして、すべての二世組織に対し、1942 年 3 月 22 日に開催された組織会議へ 3 名の代表を派遣するように要請したが、その時点までに多くの日系組織は、この統合プロジェクトに向けた計画をすでに策定していた。ブリティッシュ・コロンビア州保安委員会が、この統合された日系カナダ人市民評議会に「寛大かつ断固たる」姿勢をとるとの決定をしたが、同時に、「日系カナダ人市民評議会」は「日本戦時保安委員会」との協力関係にある場合にのみ、保安委員会と交渉する代表権が与えられた。しかし、この二つの組織の間には、ごく短期間のうちに社会的・心理的な対立が生じた。

家族単位での日系二世集団移送（私の親戚ではない田中が代表を務めた）が、1942年4月10日頃に結成された。この組織は、既婚者や家族を持つ人々が他の組織に見捨てられたために設立され、家族単位での移送交渉を継続することを主張した。

保安委員会が新方針を決定：1942年4月10日。

ブリティッシュ・コロンビア州保安委員会により、日本人連絡委員会の運営に関する新方針が発表された。

「通知」

保安委員会自身は、我々がよく知っている日系人社会の事情を元にして、既存のいかなる日本人委員会も承認しないことを決定した。ただし、保安委員会が承認した日本人の代表団体は、3名または5名からなる交渉委員会を結成することができる。保安委員会の扉は常に彼らに開かれている。

オースティン・C・テイラー 委員長

B.C.保安委員会

5. 家族単位での二世集団移住委員会のパンフレット：

我々は帰加カナダ人に対し、家族単位での移住を要求するよう懇願したが、彼らは大した努力もせずに諦めてしまった。我々はJ.C.C.評議会に対し、全力を尽くすよう説得したが、彼らもまた早々に諦めてしまった。彼らは、我々の共通の悩みを話し合うための最後の日系人総会さえ開催することを拒否した。我々は保安委員会と話し合い、書簡を送り（写しを同封）、弁護士を派遣した。我々は依然として要求を続けている。なぜなら、祖国のために払った莫大な犠牲に照らせば、我々の要求こそが最も合理的であると信じているからだ。この確信のもと、我々は残された最後の自由——家族単位での集団移住によって家族と共に暮らす自由——を確保するために、様々な手段に訴えた。

パンフレットの主な論点は以下の通りだ。

我々は、いかに不合理に見えようとも、これまでのあらゆるカナダ政府の命令には「イエス」と答えてきた。しかし、家族を引き裂くことになる最後の命令に対しては、断固として「ノー」と言う。我々は英国生まれの英国臣民であり、学校や教会で英国のフェアプレー精

神とキリスト教の信仰を教えられてきた。今、貴殿らは我々に人間の尊厳と権利のあらゆる本質を受け入れるよう強要している。たとえ動物世界であっても、家族生活は尊重されるものであり、カナダ政府は我々のカナダ軍への従軍申請を断った。貴殿らが自称する民主主義国家とは、一体何なのか！我々は、一瞬たりとも目的から逸脱してはならず、我々の大義に害を及ぼすような行為をしてはならず、いかなる時もカナダの理想に反する行為をしてはならないと強く主張する。強制収容反対は決して我々の目的ではないことを忘れないでほしい。我々の目標は、家族単位での大規模な移住である。

このグループは、「ガンバリヤ」や「ヤケモノ」といったかなり悪い評判に苦しんできた。無責任な日本領事館職員がかなり悪質なプロパガンダを行い、それが日系カナダ人の多くの自発的な強制収容所への移動を招いたからだ。これは新保教授の著書にも言及されている。

田中が R.C.M.P. に連行され、内堀氏がそのポストを引き継いだ。彼は帰加二世であり、英語に難があった。私の兄、ハーバート・E・田中は、あらゆる交渉において彼を助けた。この頃には、帰加グループと森井グループは、家族と共に自立キャンプ（Self-supporting camps）に出発していた。

二世集団移住グループは、BC 州保安委員会に対し、保安委員会が連邦政府に要請すればオタワは家族単位の移住を検討するだろうと説得しなけりなかつた。しかし、オースティン・テイラー少佐の態度は以前と変わらなかつた。実際、彼は集団移住グループが弁護士をオタワに派遣したことに不快感を示していた。このグループが、保安委員会と友好的な合意に達する見込みは全くなかつた。結局、集団移住グループは私に対し、広報活動を担当するよう依頼することを決めた。まず私は『デイリー・プロヴィンス』紙を訪れ、4 分の 1 ページ分の広告を掲載しようとしたが、その広告はブリティッシュ・コロンビア州保安委員会の承認を得なければならぬと言われた。次に、私は篠田氏と共に、弁護士ポール・マーフィーの事務所で行われた新聞記者との会見に同席し、シアトルでは 1942 年 5 月までに完了していたのに対し、なぜバンクーバーでの強制移住がこれほど遅れているのかを説明した。

ヘイスティングス・パーク・クリアリング・センターでの手続きが停滞していたため、バンクーバーには開戦前よりも多くの日系人が残っていた。クリアリング・センターには 3000 人が収容されており、バンクーバーには依然として 6000 人が残っていた。このグループはオースティン・テイラー少佐に対し、家族の移住を懇願したが、彼は依然として拒否した。大量移住グループはオタワに代表団を派遣して抗議したが、「検討する」と言われたものの、最終決定権は B.C. 保安委員会にあり、委員長はこれを拒否した。

今や、苦々しさ、怒り、そして窮屈さが日本人社会に蔓延しており、彼らはブリティッシュ・コロ
ンビア州保安委員会との協力を停止した。これが、過去 5 週間に移住した者がほとんどいなかった
理由だ。施設も建築資材もない孤立したスロカン・バレーに、年老いた女性や子供たちを放り込ん
で、「もう自分たちで何とかしろ」などと、保安委員会はよく言えるものだ。寒さが来る前に屋根の
下に身を寄せたいなら、日系人は自分たちでやらなければならないのだ。現在、市内に健常な男性
は百人にも満たないが、一方で 1300 人近い男性が道路建設キャンプに収容され、何もしていないで
いる。こうした内容を含む報告に対し、私は匿名での掲載を許可された。翌日、『デイリー・プロヴィ
ンス』紙に以下の論評が掲載された。

日系人強制退去の失敗を批判

(1942 年 6 月 2 日)

当地の日系人代表は本日、ブリティッシュ・コロンビア州保安委員会の委員長に対し、日系
人の強制退去に失敗したこと、および連邦政府の承認を得た計画の検討を拒否したことを非
難した。

同スポークスマンによると、連邦労働省および外務次官は、家族単位での集団移住に関する
日系人の提案を検討し、代表者に対し、オースティン・C・テイラー氏を通じて連邦政府に
指定移住地域の設定を要請するよう助言したという。

我々の知る限り、テイラー氏は連邦政府に地域の指定を要請することさえ拒否している。

同スポークスマンは、日系人は家族の離散に反対しているが、保安委員会は男性を妻や子供
から引き離すことに固執しているようだと言った。

保安委員会は、この新聞記事に対してコメントを控えた。

『ニュース・ヘラルド』紙に投稿した記事も、本質的にはこれと同じ内容だった。

6. 日本人保護国の代表者たち。

バンクーバーの著名な家具製造業者である田中治太郎（チャールズ）と、有力な輸出入業者である
西尾一平が、カナダ在住の日本人代表として活動する委員会に正式に任命された。彼らの任命はス
페인総領事館を通じて行われ、オタワによって承認された。この任命に先立ち、私は川崎一郎領
事と数回面会した。外交官の交代が間近に迫っていたため、私は彼とその家族に「ボン・ボヤージ
ュ」と別れを告げた。

7. 家族の移住が承認される。

1942 年 6 月 25 日、ブリティッシュ・コロンビア州保安委員会副委員長のミード大佐が、西尾氏と私に電話をかけ、二世集団移住グループのリーダーを知っているかどうか尋ねてきた。彼は私に、集団移住グループへ伝言を伝えるよう求めた。彼らが要望を記した請願書を持参することを望んでいたのだ。

7 月 1 日午前 10 時、ブリティッシュ・コロンビア州保安委員会の事務局にて、上堀 S 氏、ハーバート・タナカ氏、吉田秀夫氏が、西尾氏と J・タナカ氏をオブザーバーとして伴い、同委員会の執行部全員と面会した。テイラー少佐とシラス氏は非常に機嫌が悪かった。テイラー少佐は「大量移住グループ」に対し、「戦時措置法の下では、貴グループは裁判なしに無期限に収容される可能性がある。なぜ今、貴方たちと話しているのか自分でも分からない」と述べた。彼は約 15 分間説教を続けた。その頃、委員会はグループの請願書を読み終えており、テイラー少佐とシラス氏は席を立った。詳細な計画はミード大佐に委ねられた。

協議の結果、独身者の要求を除くすべての要望が受け入れられた。突如として吉田氏が委員会を信頼できるかと尋ねると、ミード大佐は請願書を机の上に投げつけ、引き出しから電報を取り出して言った。「これを読みたいか？これは将校に対する侮辱だ」。すぐにハーバート・タナカと上堀氏が割って入り、電報を見ることを断ったため、この一件は終わった。『強制退去の歴史』において、この顕著な功績を無視することはできない。

1942 年 7 月 1 日以降、すべては非常に順調に進み、ブリティッシュ・コロンビア州保安委員会は満足した。1942 年 10 月 30 日、ヘイスティングス・パーク・マニング・センターからスロカン・バレーへ向かう最後の列車が日本人を乗せて出発した。乗客のほとんどは高齢の女性と幼い子供たちで、108 人の病人と介護者 1 人が残された。彼らは、ニュー・デンバーの日本人病院が冬までに完成することを願っていた。私の家族も、最後の移住者たちと共にスロカン・バレーへと向かった。

二世集団移送グループのパンフレット：1942 年 7 月 1 日午後。

「日本人家族を単位として移送し、冬までに家族の再会を完了させたいという集団移送グループの要望が、ブリティッシュ・コロンビア州保安委員会によって認められた。今後、この集団移送グループは当局と協力していく。」

8. 委員会が『ニュー・カナディアン』紙を接収へ。

1942 年 4 月 2 日、ミード委員（大佐）はある当局者宛てに書簡を送り、有料広告が『ニュー・カナディアン』紙に掲載されていることについて、「委員会は『ニュー・カナディアン』紙を接收し、公式公告を掲載するとともに、すべての日本人に対して無料で配布する意向である」と述べた。（B.C. 保安ファイル。）戦時終了までの『ニュー・カナディアン』紙の内容は、各号が印刷される前に検閲官の承認を受けていた。（ファイル番号 31）

1942 年 7 月 4 日、委員会発行の新聞（『ニュー・カナディアン』）の英語版は、その対立的な方針から集団移住グループに冷淡な態度をとっていたが、事態の急変に驚いた。同紙は、非協力から協力へと態度を転換したことを触れ、社説では、家族単位の移住はいずれにせよ政府の意向であったため認められた可能性があると述べ、まるで「悪ガキ」たちが突然立ち去ったかのような印象を与えている。同紙は、大量移住グループが直ちにオタワおよびブリティッシュ・コロンビア州保安委員会と会談したことを知らない。同グループは、家族の分離は失敗に終わる運命にあり、米国の政策のように家族単位での移住に調整すれば成功すると確信していたのだ。

日系アメリカ人の兄弟たちは、経済状況にかかわらず、住居、食料、世話、保護を常に政府から保証されていた。一方カナダでは、委員会は、必要とされる範囲において、当該者の住居、食糧、世話、および保護を提供しなければならない。それゆえ、1941 年から 1947 年にかけて、カナダ政府が被収容者の世話に費やした費用はわずか 13,359,392 ドル、すなわち年間予算の 0.001%に過ぎなかった。この費用はマッケンジー・キング首相によって議会で公表された。カナダ人被収容者の世話にかかる費用は、アメリカ人被収容者の世話にかかる費用よりも 1 人あたり 40%安かった。

9. 結論

帰加カナダ人グループ、J.C.C.評議会、および大規模移住グループは、家族単位での移住に積極的に参加した。家族単位での移住は最終的にブリティッシュ・コロンビア州保安委員会によって認められ、当初の家族分離という方針の誤りが認められた。こうした失敗の結果、保安委員会は移住の歴史において最も重要なこの行事へ、自分たちが管理する The New Canadians のスタッフを招待しなかった。したがって、彼らは全容を知らない。

霧が立ち込める秋の薄暗い森の中、スロカン湖に囲まれたその場所は、今後 3 年から 6 年間にわたり「カナダ式」収容が行われる新たな拠点となり、多くの二世や三世そこで生まれ育った。この苦い混乱、幻滅、そして悲しみを、我々以外に誰が知り得ようか。時間は偉大な修復者であり癒し手だ。我々はすぐに忘れてしまう。

この大規模な強制移住は、貪欲で権力欲の強い政治家たちによって我々に押し付けられたものだ。彼らは、この地で生まれた息子や娘たちを「敵性外国人」と呼んだ。常に沈黙し、静かな日本人の気質は、多文化・多民族のコミュニティが人種差別に反対するであろうと信頼し、常に謙虚で、無関心の傍観者であり続ける。歴史は常に繰り返す、と人々は言う。太平洋の向こう側にいる血縁者たちが、自らの生存のために、別の種類の攻撃的な政策や戦略を打ち出さないと、どうして確信できるだろうか？

我々は自らの悲しい歴史から何も学んでいないのか。かつて彼らは我々に、カナダ人一般と同じ権利を謳歌する機会を与えなかった。今、その機会は 20 年と 5 年以上にわたって、私たちにあった。それなのに、我々は怯えた問題児のように、人権が銀の皿に乗せられて、私たちに与えられるのを待っているのか？ おそらく我々は、臆病な男たちの言葉に長く耳を傾けすぎたのだろう。今こそ、政治的・社会的に参加する時だ。そうしなければ、その機会は永遠に失われてしまう。

（署名：ジタロウ・チャールズ・タナカ）

大木崇による注記

ジタロウ（「チャーリー」）・タナカは 1905 年 11 月 27 日、日本の滋賀県で生まれ、1911 年に 5 歳でバンクーバーに到着し、先に移住していた父のもとへ加わった。彼はバンクーバーで育ち、コミュニティの指導者、実業家、そして戦時中の記録者となった。

第二次世界大戦中、スペイン領事館が田中治太郎（西尾一平と共に）をカナダ在住の日本国民の代理人として任命したために、田中は日系カナダ人とカナダ当局との間の主要な仲介者の一人となった。彼は通訳、顧問、連絡役を務め、ブリティッシュ・コロンビア州全域の強制移住地や道路建設キャンプを巡回した。その活動により、彼は日系カナダ人の強制移住行政の中心的な立場に置かれた。

彼の最も重要な貢献の一つは、妻の澄子と共に、1941 年 12 月 7 日から 1944 年 10 月 16 日までの期間をほぼ毎日記録した 177 ページに及ぶ文書を作成したことだ。この記録は現在、日系カナダ人の強制収容を研究する歴史家にとって主要な一次資料となっている。

田中一家は 1942 年 11 月、レモン・クリークに収容された。1943 年、一家はモントリオールに移住し、そこで治太郎は家具製造業を再開し、後に地元の日系カナダ人市民協会の会長を務めた。彼は 64 歳で引退し、やがてミシサガに移住、1990 年にそこで死去した。